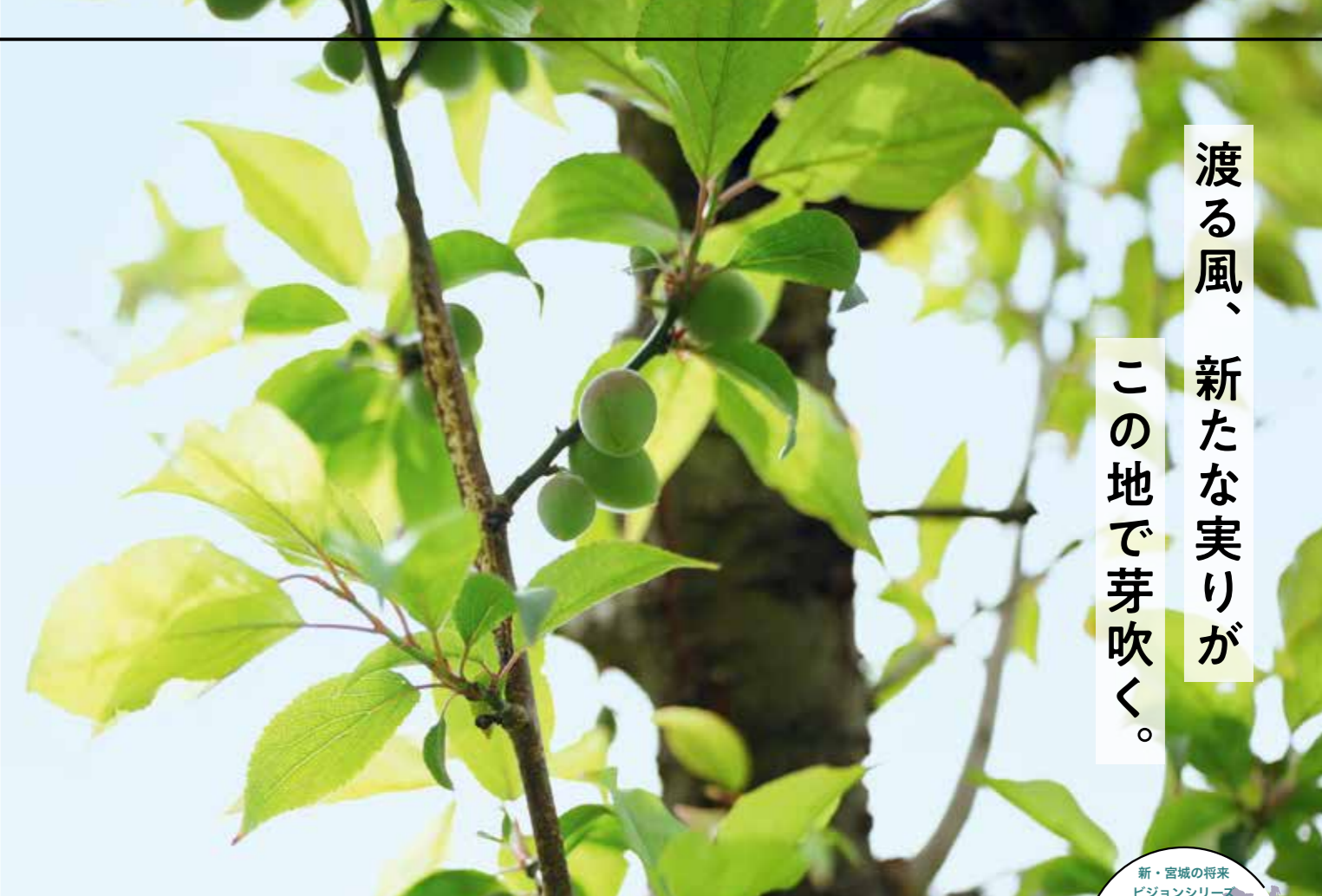


渡る風、新たな実りが

この地で芽吹く。



県政運営の基本指針「新・宮城の将来ビジョン」に基づき、各分野で魅力的な活動を展開する県内の企業や団体などを紹介するコーナーです。今回のテーマは「経済・産業」。角田市で農業を営む「株式会社館島田ファーム Dero」の代表を務める大泉太貴彦さんにお話を伺いました。



若き力がつなぐ事業継承



株式会社館島田ファーム Dero の代表を務める大泉太貴彦さん。神奈川県藤沢市出身。東京都で不動産業に従事した後、妻の実家がある角田市へ移住。同社に社員として勤めた後、令和7年1月、代表取締役へ就任。今年6月には、県認定の優れた農業者である「青年農業者」に選出されました。

「梅花の里」角田市。この地に新たな風を吹き込んでいくのが、「株式会社館島田ファーム Dero」代表取締役の大泉さんです。子育てを機に県外から移住した大泉さんは、自然環境を生かせる複合的な仕事があったの思いから、大学時代にアルバイト経験があった農業を選び、同社の前身である農事組合法人に雇用就農しました。しかし、当時の法人の平均年齢は70代。担い手の高齢化という切実な課題を前に、大泉さんら若手従業員3人は事業の継承を決定し、令和6年、株式会社化という一歩を踏み出したのです。

見える化で育む、組織の好循環

大泉さんが推進するのは、農業の「見える化」です。データの集計と分析を徹底し、戦略的

伝統の梅を慈む

同社の大きな柱となっているのが、角田名産の「梅」です。大泉さんは、梅の栽培面積を従

来の3倍に拡大し、加工・販売まで一貫して行う体制を強化しました。こだわりの梅干しは、自社栽培の赤シソを贅沢に使用。傷ついた実や潰れた実も無駄にせず、工夫を重ねて新たな商品へと生まれ変わらせています。また、大泉さんのまなごしは、数十年先の未来にも向けられています。近隣の梅の木は樹齢30年を超える老木が多く、今後の生産量の維持が難しいため、苗木を植えて新しい梅園をつくることにも着手しているそうです。

「水産も米も畜産も強い宮城で、果樹も伸ばせたら嬉しい」。その熱い思いには、地域の農業を次なるステージへと押し上げる、確かな希望が宿っています。次世代が育つ土壌を

もいるそうです。「実際にやってみて、納得して入ってきてほしい」。そう語る背景には、社員一人一人の自発性を尊重したいという思いがあります。大泉さんが耕しているのは、農業が続いていくための「人の連鎖」そのものです。「業」として続けるために



株式会社館島田ファーム Deroの皆さん。「Dero (でる)」という社名は、「泥 (どろ)」の訛りの響き由来しています。この土壌から、米、ネギ、梅、赤シソ、大麦など、多彩な作物を丹精込めて育てています。

明日を耕すことを、

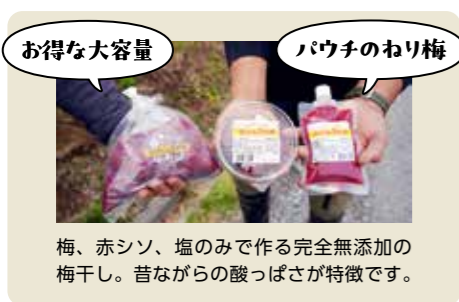
楽しめる「業」へ



上：ドローンによる農薬散布の様子
下：GPS付きトラクターとビニールハウスでの稲の育苗の様子

大泉さんが考える農業への向き合い方はとても柔軟です。「固定観念にとらわれず、価値を上げて広げるのも、守ることにつながると思っています」。自ら垣根を越えてきた大泉さんだからこそ、農業を誰もが挑戦でき、高い水準で活躍できる魅力的な職業にしたいと考えています。「もっとたくさんの人に、まずは気軽に農業をやってみてほしい」。そのオープンな姿勢は、

自社だけでなくとどまりません。地域ぐるみのブランド化や水産業など他業種との積極的な連携も視野に入れ、産業の枠を超えた新しい価値の創造に挑もうとしています。農業は伸びしろしかない。そう笑って未来を語る大泉さんの軽快な足取りは、希望に満ちた地平を鮮やかに切り開いています。



梅、赤シソ、塩のみで作る完全無添加の梅干し。昔ながらの酸っぱさが特徴です。

株式会社館島田ファームDero



ホームページ



Instagram